

学園

だより

平成15年6月20日発行
財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@tw.bekkoame.ne.jp

<http://cali.lin.go.jp/japan/k33/rakudai/index.htm>



第39期 入学生 蒜山ハーブガーデンにて

巻頭のごとば

校長 古好秀男

財団法人中国四国酪農大
学校は、昭和四十年農林水
産省の認可を受けて以来、
創立三十九年を迎えており
ますが、その間、農林水産
省、中国四国農政局、構成
県、地元川上村、八束村や
JRA、地方競馬全国協会、
酪農ヘルパー全国協会、お
かやま酪農協同組合、蒜
山酪農農業協同組合を始め、
多くの関係者の温かい
ご指導、ご援助を頂きまし
て今日まで優秀な酪農後継
者を養成することができま
したことは、酪農大学校の
関係者の皆様と共にご同慶
に耐えない次第でありま
す。

思い起こせば、酪農後継
者の養成に限りない情熱を
傾注して、昭和三十六年に
岡山県立酪農大を創立
以来四年間の卒業生が八四
人、財団法人中国四国酪農

大に改組して以来の卒
業生が九四四人で総計一、
〇二八人の力強い優秀な後
継者を送り出しています。
そのうち、五十二%が酪農
後継者、二十五%が畜産関
係団体に就職され、それぞ
れの地域で中核的な指導者
としてすばらしい活躍をし
ておられます。

ご承知のとおり、今日ど
んな職種においても担い
手・後継者の不足は本当に
深刻な重大な問題です。今
や国、県、市町村、関係団
体をあげて担い手、後継者
の養成には相当の力を入れ
ているが、伸び盛りの若者
が自らの職業を選択するた
めには、まず最初にその職
業に対して最高の喜びと魅
力を感じなければ事は始ま
りません。そのためには、
教育施設としては、特に魅
力のある新鮮な教材が確実

に必要なのです。

更には、時代の変遷を検
証することも大切です。江
戸時代、明治、昭和の大改
革と常に時代に沿って歴史
は繰り返されて発展してき
ていることは、先人達の血
の滲むような努力によって
無しとげられてきました
が、今日またその時代が到
来したのか、平成の大改革
が行財政改革を柱にあらゆ
る機関、団体等が合併、統
合を唱え、時代にあった経
営合理化を図り難局を乗り
切ろうとしていることはご
承知のとおりであります。
酪農業界も例外ではありま
せん。酪農専門農協の統廃
合に伴い、県下单一農協の
合併並びに総合農協の広域
合併、指定生乳生産者団体
のブロック化、畜産協会等
近年にない経営合理化や濃
密指導サービスを目的に合

併し歩き始めています。
しかしながら、広域合併
をすることは、従来のよう
に組合、行政機関が実施し
てきた濃密な酪農家の個々
のサービスを提供する考え
方の時代は終わったのでは
ないかと思えます。
これからの酪農家は指導
を受ける必要があれば、積
極的に自らが働きかけない
と、所属する組合、協会等
の範囲が広すぎるため、サ
ービスを受けられる状態で
はありません。このことか
ら基本的にはサービスを受
ける側も考え方を大きく変
える必要がある時代にきて
いると思えます。
従来ならば、放っておい
ても庭先まで指導に来て、
酪農家を指導機関が密接に
連携を保ちながら、その地
域に配属された指導者を先
生と呼び、生産に対する苦
労を共にしてきたもので、
指導者が転勤をした時に
は、その行き先まで知って
いて親しく懐かしそうに話
したものです。
今では、誰がいつ来たの
か、その地域の指導者を全
く知らない状態になってい
るのが現状です。広域にな

ればなる程、従来のように
行き届いたサービスを求め
ることはサービスを求める側
も受ける側も困難です。ど
んな小さな事でも指導者が
親身になって酪農家に足を
運んで対話をしながら濃密
指導をしていたものが、今
では一日中パソコンに向か
うか、インターネットでの
指導が主流をなしており、
酪農家の顔を見ながらの感
情が入った指導ができてい
ないのが最大の欠点だと思
います。しかしこれも時代
の流れと割り切って対応し
なければ新しい時代の流れ
は生まれてきません。

卒業生の皆さんも必要が
あれば積極的に自らの指導
者を求め、問題の解決と経
営安定につなげて行ってい
ただきたいと願うものでは
ないかと。酪農大にも足を運
んでください。お待ちいた
しております。皆様の益々
のご健勝をお祈りいたして
おります。



教務課だより

第二十七期生 卒業証書授与式

平成十五年三月二十日

(別表) が卒業。

理事長表彰 児玉純子

全国農業大学校協議会表彰

児玉純子

校長表彰

優等賞

藤田尚子・谷田有香

三崎悦子・藪内 藍

精勤賞 浅岡 望

努力賞

長田重信・宮西巧一

卒業論文賞

高橋知里・藤井康永

三谷 綾

第二十九期生入学式

平成十五年四月四日、第

三十九期生二十五名(別表)

が入学。

内訳は、男子学生十四名、

女子学生十一名です。後継者が十三名です。出身地で見ると、構成県出身者が十九名、うち岡山県出身者が十名となっております。



37 期 卒 業 生

農大研修生の集い

昨年十月三十〜三十一日に蒜山地域で「第二十回中国ブロック農業大学校研修生の集い」が開催されました。当日は中国五県の県立農業大学校と酪農大学校の学生が一堂に集まり、総勢

百四十名あまりという盛大な大会となりました。三十日には三木ヶ原の休暇村蒜山で学生同士の交流会、翌日はソフトボール及び卓球の大会が開催されました。当日は、雨が予想されていましたが、快晴となり、急ピッチのグラウンド復旧のおかげで、無事開催することができました。

酪農大学校の成績はというと、ハードな練習の成果も現れ、ソフトボールは並み居る強豪を破り準優勝、

卓球は予選敗退という輝かしい？成績を納めました。今回、酪大でホスト役を務めさせて頂きましたが、他の農業大学校には蒜山を満喫して頂けたのではないかと思います。

惣津律士銅像の移転

今年三月、長年、県道中福田・湯原線沿いで牧場を行き来する学生を見守って来られた惣津律士初代校長の銅像が、道路の拡幅に伴い本校の体育館前に移転されました。惣津氏は、酪農大学校の創設に限りない情熱を傾注され、また創設後は、自らが初代校長として多くの酪農後継者を育てられた方であります。今は、体育館前から勉学に励んでいる学生のいる校舎を見守って頂いています。

卒業生から 在校生から



同窓会会長 筒井 一

拝啓

新緑の候、会員の皆様は、益々ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、同窓会活動には、ご理解ご協力を頂きまして、誠に有り難うございます。

昨年七月十五日の総会におきまして、再度会長の大役を仰せつかりました。微力ではありますが、皆様方のお力添えを頂きながら、任期終了まで務めさせて頂きますので、よろしくお願い申し上げます。
さて、私事で恐縮ですが、酪大を卒業して酪農をはじめ、既に三十五年が過ぎました。就農当初から、自給飼料の生産に関心を持ち努力をしてきたつもりですが、たかが草作り、されど草作り、なかなか思うよう

にはいきませんでした。当時は、国の事業により大規模草地造成がされており、飼料基盤があったのですが、機械が無いために労力が足りず収穫が思うよう出来ないと、翌年からこれを

補助事業により機械導入が進み、飼料の確保が可能となるにつれて牛の頭数も増加し、専業酪農に移行してきました。

酪農は循環型農業の最たるものだという認識のもとに、糞尿を土地還元しながら草作りをやってきたのですが、何年か経つと牛の調子が思わしくない状態が起ころし始め、更に病牛の総合商社と違っていいほどいろいろな病気で、毎日獣医さんの世話にならなければならぬ世話になると共に、

廃用牛の頭数が増え、ずいぶん悩みました。そんな折、ある専門書で堆肥は発酵させてから利用しないと牛のコンディションが悪くなるということを知り、それから真剣に堆肥作りに取り組みました。

平成十年、地力で堆肥舎を建設し、利用を始めたところ意外とうまく発酵が進み、冬場でも四ヶ月、夏場なら三ヶ月もするとかなり完熟に近い堆肥が出来るようになり、翌年からこれを草地に散布するようになりました。丸三年が過ぎた十年から、病気の発生が少なくなり、廃用も上半期に二頭出て以降、現在までは一頭も出ておらず、今年になつてからは、時々乳房炎が出る程度で、病気らしい病気はほとんど無くなり、効果の大きさに満足しております。

今後これを継続していけば、粗飼料の品質が更に良くなり、牛のコンディションも乳量ももっと良くなるものと考えております。もし同じ悩みを持っておられる方は試してみてください。

同窓会事務局より

財団法人中国四国酪農大 学校同窓会は二年に一回開催されておりますが、昨年の平成十四年度が開催年にあたり、七月十五日に蒜山国民休暇村で第五回同窓会



を開催しました。

当日は、鳥取県支部の山谷茂氏、山口県支部の岩崎孝明氏、香川県支部の横田氏、構成県外支部の垂谷太一氏他十一名の出席のもとで開催され、同窓生が一同に集い胸襟を開いて、同窓生の近況報告、酪農の情報交換等がなされ和やかに懇談会を持つことができました。

また、山口県支部総会が平成十四年八月十七日に山口市で盛大に開催され、本会事務局（酪大）から中山副校長と津田主任が出席させて頂きました。

（事務局 中山記）

卒業して



第三十七期生 藤井 康永

私は、この春卒業した三十七期生の一人です。私の家は専業農家で、稲作を中心に和牛繁殖と人工授精所を開設しています。酪大を卒業してから後継者として仕事をするつもりでしたが、四月から広島県畜産技術センターで臨時職員として働くことになりました。

もともと就職する予定ではなかったのですが、とても気が楽だったので、急に働くこととなり、心の準備もできないまま、『人間関係がうまくいくのか』『ちゃんと仕事ができるのか』

とても不安でした。事実、数日間は分からないことばかりで、とてもつらく、仕事を終えて家に帰っても人工授精はうまくできなくて、壁にぶつかってばかりの毎日でした。時に「三十期生のみんなんも苦労しているんだらうなあ」と思い、みんなも頑張っているんだから僕も頑張ろうと自分を励まして毎日仕事に行きました。とまどいばかりで大変でしたが、酪大で学んだ知識と経験で十日くらいで大分仕事になれ、今では毎日元気に働いています。これも酪大でのつらい研修のおかげだと思っています。今、一年生は苦しい時だと思いますが、社会に出てからその経験が自信と勇氣になることを実感しました。

今の私の目標は、人工授精の技術を向上させて、父のように人工授精師として広島県の畜産に貢献できるようにになりたいです。そのためにもっともっと勉強して、早く一人前の授精師になります。私の人生の研修はまだ始まったばかりです。

昨年四月に酪大に入学して早くも一年が過ぎました。初めての寮生活や牧場での作業に楽しみと同時に不安もありました。当番で回ってくる酪大生活では、朝五時三十分からの搾乳や免許取得のためのトラクター・牽引の練習など大きな壁となるものがたくさんありますが、面識のない同級生と作業を通じて話せるようになったり、打ち解け合ったりして徐々に楽しく過ごせるようになりました。

私たちの前に現れる大きな壁も、その都度、先生や先輩方に教えていただきながら乗り越えることができました。もちろん、同級生の友達とも励まし合い、支えられてきました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

勉強や作業以外では本当につまらかった蒜山登山や中国地方の農業大学校とのソフボール大会&交流会などあり、多くの思い出を作ることができました。特に農大交流会では、酪大が主催校となり、他県から来られる農業大学校を歓迎する側で、みんな準備に忙しく動き回っていました。友達同士で「私たちも歓迎されたいね。」とつぶやくことも……。でも頑張った分、交流会も無事に終わり、今となつてはいい思い出としてみんなの心に残っている……。はず？。冬の岡山農大とのスキー交流では初めてスノーボードに挑戦した人も多かったみたいですが、上達も早く、最後にはほと



一年を振り返って

第三十八期

杉田くみ

んどの人が滑れるようになっていました。いろいろなことがありすぎて語り尽くせない一年間、個性派ぞろいの先生方や先輩方に手取り足取り教わりながら私たちは成長してこれたと思います。もちろん、第1牧場のホルスタイン・第2牧場のジャージー達も私たちにいろいろ勉強させてくれてありがとう!!。他にも、みんなの健康を何より心配してくれる食堂のおばちゃん、蒜山地域の方々。たくさんの人・牛たちの協力で無事に一年を過ごすことができました。二年生になり、後輩に教える立場だということがいまだに実感できませんが、三十八期生らしい先輩でありたいと思っています。長期にわたつての校外研修で、今より更に成長して帰ってきたと思います。酪大職員のみなさま、今年度も三十八期生をよろしくお願ひします。(見捨てないでネ)

職員紹介

| | |
|-------|--------|
| 校長 | 古好 秀男 |
| 副校長 | 中山 敏之 |
| (総務課) | |
| 課長 | 新免 真哲◎ |
| 主任 | 津田 清子 |
| | 有富 英美 |
| (教務課) | |
| 課長 | 副校長兼務 |
| 課長補佐 | 橋本 尚美 |
| 技師 | 岡田 英樹○ |
| 助手 | 長綱 則之 |
| 調理技術員 | 講元 勝代 |
| | 石原 峰子 |
| | 谷口 育子◎ |
| (経営課) | |
| 課長 | 山田 徹夫◎ |
| 第一牧場長 | 経営課長兼務 |
| 技師 | 芦田 草太 |
| 助手 | 樋口 照夫 |
| 第二牧場長 | 坂部 吉彦◎ |
| 技師 | 篠 啓介◎ |
| 技師 | 溝口 泰正 |
| 助手 | 磯田 博 |
| 助手 | 池田 良弘 |

◎印は新職員
○印は内部異動

第1牧場だより

今年は例年になく春の訪れが遅く、蒜山三座に残った雪が厳しかった冬を物語る今日この頃ですが、卒業生の皆様にはお元気で活躍のこととお喜び申し上げます。

平成十五年度の第一牧場は、新しく山田場長を迎え、芦田技師、樋口助手の三人でがんばっています。

乳用牛においては、家畜改良を迅速におこなう目的で輸入精液、受精卵移植技術を積極的に活用しており、職員・学生の努力の甲斐あって年々牛群の質も向上しています。現在の乳量は平均八、四〇〇kgですが、九、〇〇〇kgを越えるのも近いと思われます。

また、BSEの発生にともない平成十四年度から規

模を縮小した肥育牛については、一時期に比べ価格が安定してきましたが、依然として苦しい状態であるため、引き続きジャージーF1の雄のみを飼養し現在の規模を維持していく予定です。

牧草の状況については、平成十四年度は全体的に天候に恵まれトウモロコシの生育は順調でした。このため、サイレージはバンカーサイロ二基ともにほぼ満杯となり前年度に比べ微増という結果になりました。また、牧草についても草地の更新、土中散布機導入の効果で収量が増加しました。本年度も草地を更新し増産を図ることにしています。

機械についても、新しく七十五馬力のトラクタを二



台導入し、大型特殊免許取得試験の練習や、草地での作業に活躍しています。

最後になりましたが、今年も本校から二十二名の卒業生が力強く巣立っていき、二十五名の新入生が期待に胸をふくらませて入学してきました。卒業生の皆様には酪農大学の近くに寄り際には、本校に足を運んでくだされば幸いです。

飼育頭数

平成15年4月1日

| 区分 | 第一牧場 | 第二牧場 |
|------|------|------|
| 経産牛 | 40 | 80 |
| 育成子牛 | 38 | 49 |
| 乳用牛計 | 78 | 129 |
| 肥育牛 | 25 | — |
| 繁殖和牛 | 2 | — |
| 肉用牛計 | 27 | — |
| 合計 | 105 | 129 |

第2牧場はジャージー牛（単位：頭）



第2牧場だより

例年より少し厳しかった冬も終わり、酪大第二牧場にもようやく春が訪れました。

日々暖かさが増し、放牧地の牧草も日増しに緑が濃くなっています。四月十日には恒例であるポプラ並木での白樺の植樹が行われました。また昨年よりも一週間ほど遅くなりましたが、四月三十日に初放牧を行いました。約五ヶ月ぶりに放牧されるジャージー達は元気に飛びだしていきま

した。さて、昨年九月、JRA畜産振興事業の「畜産経営担い手育成研修支援事業」によって完成したバンカーサイロを初めて使ったのコーナーサイレイジ作りが行われました。途中で少々雨に

降られましたが、出来はまずまずの様で牛たちもよく食べてくれています。

そして昨年は熊本から四頭、群馬から十頭、そして真庭地区内から十二頭、計二十六頭の導入牛を迎えられました。これは、生乳の増産対策と、さらなる改良を推し進めるために、このような多数の導入を行いました。また、今後岩手県からも導入を行う予定です。最初はなかなか新しい環境に慣れなかった彼女たちですが、出産を経験し、毎日の搾乳で人に触れられることにも慣れ、今では牛舎内で元気に日々すごしています。

『エコオフィス21「まきばと握手」実証事業』の取

り組みで、県庁から排出されるペーパーシュレッダーを第二牧場において、牛床の敷料として、また堆肥の副資材として昨年から利用しています。このペーパーシュレッダーは、安価であり、敷料としての機能も使用方法によっては、他のものと遜色無く、また堆肥の副資材として使用しても良質な堆肥ができています。

現時点ではまずまずの成功といえるのではないのでしょうか。今年度も継続していく予定です。今後さらなる調査結果を卒業生の皆様にも御報告させていただきます。たいと考えております。

第二牧場も平成十五年度を迎え、新体制となりました。岡田英樹前場長が教務課へ移り、その後任として坂部吉彦が、田中健嗣の後任としていざさ啓介が新た

に加わりました。なお、磯田博、池田良弘、溝口泰正の三名は引き続き第二牧場の担当をしております。卒業生や関係機関のみな

ま、どうか近くにおいでの際は是非お立ち寄りの上、お声を掛けていただきます。ようお願いします。

